

重点取組分野	令和 7 年度		総括	重点取組分野	令和 8 年度		総括	重点取組分野	令和 9 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果			具体的取組	自己評価結果	
学力向上	①単元や一単位時間で育成を目指す資質・能力を明確にし、子どもが主体的に学べる授業づくりをする。教材やICTを効果的に活用し、学習の見通しの確認と振り返りの時間を取り入れ、子どもが自分の学びを判断して選択しながら学習を進められるようにする。②重点研究テーマを「思いや願いの実現に向けて、『ひと・もの・こと』に夢中がかかり、対話的に学ぶことを通して、自分の見方・考え方を深める子の育成」とし、生活科、総合的な学習の時間を中心に、主体性や対話を通して学びを深める力を育成できるようにする。	子どもたちが意欲的に学ぶ姿が多く見られ、地域の方々や関わる学びについても多くの評価が得られたことは大きな成果である。一方で、学習内容の理解や意欲の育成についてや、保護者との連携の在り方に改善の余地がある。今後は地域や保護者とのつながりをより大切にし、子どもたちが学びを深められるよう、授業の工夫と支援をさらに進めていきたい。	A	学力向上	b1			学力向上	c1		
豊かな心	①教育活動全体を通じた道徳教育と人権月間を核とした学年ごと学級ごとの人権教育の推進。互いを思いやる気持ちを育成する活動の1つとして、委員会を中心としたあいさつ運動を行ったり、高学年の実行委員を中心にペア活動の充実を図っていく。②「自分づくりパスポート」を活用し、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、子ども自身の姿や成長を自己評価できるようにする。	心情や態度を育てる教育や自分づくりパスポートを活用した面談の効果も見られたことは大きな成果である。一方で、児童の否定的な回答もあり、心情理解や学級の実態把握、指導の工夫にまだ課題が残っている。次年度は、全職員で児童理解を深める機会を増やし、指導改善や、自己理解・他者理解を促す取組をさらに充実させていきたい。	B	豊かな心	b2		豊かな心	c2			
健康教育	①学校生活全般での活動を通じて、子ども一人ひとりが主体的に健康な生活や、食事面も含めた規則正しい生活を送ろうとする姿勢を培う。家庭と連携し、運動、食育教育に力を入れる。②各委員会など子ども主体で計画された集会や給食週間など、楽しく体を動かす機会や食について考える場を設定し、日常的に取り組む態度を養う。	教職員の声かけや保健委員会の活動により手洗いへの意識が高まり、健康な生活への意識が広がった。また、給食指導やバランスイーターワークを通して食への関心が高まった。今後は、子どもたちが自分の生活と結びつけて考えられる活動を継続し、家庭とも協力しながら健康習慣の定着をめざしていく。	B	健康教育	b3		健康教育	c3			
地域連携	①地域学校協働本部と連携して、協力していただきたいことを明確にして、校内での学習補助や校外での生活科、総合的な学習の時間等における学びの充実に向けた地域との関わり方を整理、実現する。②校内で広がりつつあるあいさつ運動を、児童の意見も取り入れながら、地域にも広げられるよう取り組む。	地域の魅力を生かした授業や人材協力により、肯定的な評価が多かったのは、大きな成果である。一方で否定的な回答なども見られ、あいさつの実践でも認識の差がある。今後は日々の学習や活動を積極的に発信し、地域との協働や子どもの主体的な取組をさらに広げていきたい。	B	地域連携	b4		地域連携	c4			
いじめへの対応	①毎月1回、いじめ防止対策委員会を実施する。全職員で学校全体の児童の様子を共有する。いじめの未然防止策を立て、学校全体で取り組んでいく。また、認知された案件の経過観察を丁寧に行い、再発防止に努める。②「全職員での共通理解」という意識のもとで指導にあたる。打ち合わせや職員会議において共通理解を充実させる。③横浜子ども会議の話し合いの場を年間計画に位置づけ、子どもたち自身が、いじめの未然防止について考える場を設定する。	児童・保護者アンケートで昨年度と同程度の良好な結果が得られ、児童が自分や相手を大切にしようとする姿が着実に育っている点が成果である。また、教職員は職員会議やいじめ防止対策会議、ブロック会議を通して未然防止に取り組み、情報共有を進めてきた。一方で、児童の困り感を早期に捉えるための見取りや、全職員での共通理解には課題が残る。今後は日常的な対話や健康観察・アンケートの活用をさらに充実させ、一人ひとりに応じた支援と早期対応を学校全体で強化していく。	A	いじめへの対応	b5		いじめへの対応	c5			
人材育成・組織運営(働き方)	①5年次以下の教職員を中心にメンターチームを組織し、ミドルリーダーが中心となって月1回の活動を継続して行う。②月に1回程度、教務会、4部会及び議事運営委員会を行い、ミドルリーダー等が全体を見通して学校運営していく場を設定する。③3か月に1回程度ブロック会を開催しブロック内で情報共有する機会を設ける。④ICTを活用した事務の効率化や情報の共有化を図るとともに、組織的な働き方改革につなげる。	今年度は、職員全体で教育活動に取り組む体制づくりとして情報共有を強化し、約9割の肯定的回答から一定の成果が確認された。一方、メンターチームの取組やDXについては否定的な意見も多く、今後は若手同士の連携を支える工夫や段階的なDX推進が求められる。また、不祥事防止に向けた研修や注意喚起を行ったが、法令順守や服務倫理には意識の差が見られ、引き続き意識向上を図る必要がある。	B	人材育成・組織運営(働き方)	b6		人材育成・組織運営(働き方)	c6			
情報活用能力育成	①子どもが端末の扱い方や特性を理解し、必要に応じて端末を利用するか選択しながら学習に取り組めるように、子どもの考えを活かした授業づくりに取り組む。②情報モラル研修会を計画し、家庭との連携をしながら子どもの情報リテラシーの育成に重点的に取り組む。③ICTニュースを保護者や地域向けに発行し活用状況を発信する。④校務のデジタル化を進め、今後を見据えた働き方改革の推進に寄与していく。	アカウントのパスワード管理を児童自身が行うようにし、児童・保護者向けに情報モラルの指導や出前授業を実施した。児童は前年度と同程度であったが、保護者の「とてもそう思う」が大きく増え、取組の効果が表れている。一方で、出前授業の効果は学年差がない。今後も日常の授業で個人情報保護を扱い、保護者参加の研修を継続しながら、児童の情報活用能力を高めていく。	B	情報活用能力育成	b7		情報活用能力育成	c7			
特別支援教育	①全ての児童にとって分かる楽しい授業、そして、心の居場所となる学級を目指して職員間で情報共有し、ユニバーサルデザインの授業と集団づくりに取り組んでいく。また、特別支援教育相談を年4回実施し、保護者と共通理解のもと、特別支援教育における環境整備を行い、特別支援教室の充実を図る。②ケース会議を適宜開催し、個別の教育支援計画、指導計画の活用を充実させ、子どもの思いに寄り添いながら取り組む。	誰もが安心して学べるよう特別支援教育の研修を行い、児童のニーズに応じた支援に努めてきた。また、年3回の特別支援教育相談を実施し、保護者と連携して支援の充実を図ったことは大きな成果である。今後は、相談の周知をさらに進め、教育相談で得た情報を全職員で共有し、共通理解のもとで一人ひとりに合った支援を継続していく。	B	特別支援教育	b8		特別支援教育	c8			
児童支援	①日々の児童の見取りを充実したものにしていこう。Y-Pやいじめ解決のための生活アンケートの結果などを関係職員で情報共有し、適切な指導の検証に努める。また、子どもから出た言葉を大切に、教育相談で一人ひとりに寄り添いながら支援をしていく。②複数指導体制の工夫と日常化を図り、全職員で情報を共有できる場を設定していく。③不登校児童の思いに寄り添い、適切な支援のあり方を保護者と相談しながら探していく。④中田小学校ルールブックをもとに、共通した指導を行う。また、内容が適切かの検証を行い、児童・保護者が安心できる環境づくりに努める。	地域の方から否定的な意見がなくなり、日頃の温かな声かけが、児童への支援として確実に生かされていることは大きな成果である。今後は、教職員の意識や働きかけの課題を踏まえ、児童があいさつやマナーについて主体的に考え、行動できるような指導を充実させていく必要がある。また、教科持ち替えにより担任が児童と関わる時間が減り、肯定的回答がやや低下している点も課題である。今後は教育相談や会議での情報共有を充実させ、学校全体で多面的に児童を支え、信頼関係を深めながらより良い成長につなげていきたい。	B	児童支援	b9		児童支援	c9			
					b10				c10		
ブロック内評価後の気付き	第一回小中ブロック研修会では、中田中学校の授業参観の後、情報教育、児童支援・生徒指導、学校行事の各分科に分かれ、それぞれの立場から現状や課題について話し合った。特に、防災安全の観点から、「引き取り訓練」については三校で話し合いを進め、時期の見直しを図った。第二回小中ブロック研修会では、中田小学校の授業参観の後、人権推進協議会を行った。講演会では、横浜市教育委員会からスクールロイヤーとして活躍の中川 尚先生を講師にお迎えし、「いじめから子どもの人権を守る」というテーマでご講演いただいた。講演後には、参加した教員から多くの質問が寄せられ、活発な意見交換が行われた。また、月1回開催しているブロック専任会では、定期的な情報交換を通して、児童生徒指導に有効な情報を共有することができた。部活動交流会や個別支援学級の交流会では、児童生徒が楽しそうに活動しており、小学生にとっては中学校の雰囲気を知る機会となり、中学生にとっては上級生としての自覚を高める良い交流の場となった。			ブロック内評価後の気付き			ブロック内評価後の気付き				
学校関係者評価	学校は、地域人材の協力や地域資源を効果的に活用し、児童が主体的に学ぶ姿を多く生み出すことができた。地域との関わりを通して学習意欲や探究心が高まり、学校と地域のつながりも一層深まった点は大きな成果である。また、いじめ防止については、職員会議やいじめ防止対策会議を通して情報共有が進み、児童が自他を大切にしようとする意識が育っている。一方で、職員間の法令順守や服務倫理に関する認識には差があり、共通理解をさらに高める必要がある。これからは、主体的な学びを他教科へ広げるとともに、職員研修や組織的な連携を強化し、教育活動のさらなる充実を図ることを期待している。			学校関係者評価			学校関係者評価				
中期取組目標振り返り	今年度は、総合的な学習において地域の人材協力や地域資源を生かした活動を充実させ、児童が主体的に学ぶ姿が多く見られたことは大きな成果である。地域との関わりを通して学びの意欲や探究の姿勢が育ち、学校と地域のつながりも一層深まった。また、いじめ防止については、職員会議やいじめ防止対策会議などを通して情報共有が進み、児童が自他を大切にしようとする意識が育っている点が評価できる。一方で、職員間の法令順守や服務倫理に関する認識には差があり、共通理解をさらに高める必要がある。今後は、総合的な学習で培った主体的な学びを他教科へも広げるとともに、職員研修や組織的な連携を強化し、児童の成長を支える教育活動の一層の充実を図っていく。			中期取組目標振り返り			中期取組目標振り返り				